新春夢放談

元気出そうよ　岡山

暗い話題が相次いだ年も終わり、新年を迎えた。カレンダーはあらたまっても、先行き不透明な景気、雇用問題、県都活性化など岡山は待ったなしの課題を山積みしている。このままでは、経済のみでなく、県民の気概も縮こまるばかり。「元気出そうよ」「岡山に“華”はあるのか」「岡山の未来は」。地元を愛し、経済界のオピニオンリーダーでもある大原謙一郎倉敷商工会議所会頭（大原美術館理事長）、岡﨑彬岡山商工会議所会頭（岡山瓦斯社長）、小嶋光信岡山経済同友会顧問（両備グループ代表）、武田修一岡山経済同友会代表幹事（広栄堂社長）の四氏に積もる思いを語り合っていただいた。

出席者（50音順）

大原謙一郎氏
倉敷商工会議所会頭（大原美術館理事長）

岡﨑　彬氏
岡山商工会議所会頭（岡山瓦斯社長）

小嶋　光信氏
岡山経済同友会顧問（両備グループ代表）

武田　修一氏
岡山経済同友会代表幹事（広栄堂社長）

司会は池田武彦本社社長

時代認識

池田　県の今後五年間のビジョン「夢づくりプラン」の骨子案がまとまり、近く成案が発表される。県民や財界がどう知恵を加えるかで本物のビジョンになる。みなさんご専門の経済はもちろんだが、今回のテーマは「〝華〟のある岡山にしよう」。岡山に〝華〟をどう持たせていくのか、存分に語っていただきたい。昨年はテロや狂牛病に加え、雇用、景気の一段の悪化など〝げんなり〟する年だった。まず、今の時代認識について。

大原　新年早々とはいえ、時代認識は明るくない。〝心の文化〟を見直さなければ切り抜けられない。二十世紀の物質文明の時代に対し、二十一世紀は精神文化の時代。それ以上に人類の生存、種としての生存が厳しく問われる時代になっている。二十世紀の社会的矛盾が未だに尾を引いている。世界的規模での貧富の差の拡大、地球的規模での環境破壊問題。二つの大きな問題が同時に突き付けられている。貧富の差を解決するため、貧しい国が富んだ国と同じになるだけでは、今の人口を地球では養いきれない。近い将来、膨れ上がる人口をどうやって地球が支えていくのか。少なくとも経済、政治、外交、軍事など今までの仕組みの中では、何も解答を出せないでいる。こうした状況に我々は直面している。解答を出していこうとすれば、精神文化面での世界相互の深い理解がなければならない。例えば米国と日本の問題だけを考えてみても、もう米国の独善で世界を動かしていける時代ではない。それを昨年九月十一日の同時多発テロが証明した。どうやって世界を動かしていくか。富める国が自ら何かを犠牲にしなければ地球上で人類は生きていけない。地球の上で人類が生きていけるよう、英知を結集して人類自身が考えていかなければならない。富める国が自らどう犠牲になるかを考えるか、もしくは富める国が他の国を抹殺しても生き延びようとするのか。この二つの選択肢しかない。二番目は人類として絶対とってはいけない選択肢だから、我々は何を犠牲にするかを一緒に考えていかなければならない。自ら何かを犠牲にする。そのことで人類を救う。これこそが新しい時代の人間としての勲章であり、〝華〟である。このことに人類は気付かなければならない。

人類の生存が問われている

大原

武田　国内どこでも、岡山県でも〝華〟というのは、にぎわいのことだと思う。岡山県にどうやったらたくさん人が来てくれて「あそこへ行けば素晴らしい出会いがあるよ」ということになるのか。例えばスイスのジュネーブは、何が〝華〟かというと、風景や風土、そこに住んでいる人間、料理などだ。さらによい美術館やよい音楽など文化的なものの比重が

NPO、NGOが大切に

武田

非常に高い。〝華〟として大切なのは強烈な個性。日本人が何のためにお金もうけし、経済活動に一生懸命になるのかを考えたとき、世界の人類のためにお金を使うことではないかと思う。ＮＰＯ（民間非営利団体）でも、ＮＧＯ（非政府組織）でもいい。一生懸命やる人間がたくさんいるんだということが強烈な個性になり得る。難民、環境、貧富の問題など人類の課題はたくさんある。国や政府ではなく、ＮＰＯ、ＮＧＯなどの組織がこうした活動に力を注いでいる国や県であることが大切なのではないだろうか。収益ばかり重視するのではなく、倫理的な筋が通った県になってくれればいい。それが〝華〟になると思う。にぎわいをどこに求めるのか、温泉があって遊んで楽しいだけではなく、「あそこへ行くと何か素晴らしい発見がある」となるよう、一生懸命取り組む県であってほしい。

小嶋　時代認識の根本は変わっていないが、二十一世紀は「新しい仕組みの時代」だ。今までの価値観、倫理観、人間観などをもう一度再構築しなければならない。二十世紀後半はアメリカ化することで日本は繁栄してきた。そして世界を含めて今、このような環境になっている。これを打開できるか。今までの仕組みの中では難しい。なぜかというと、これまでは膨らみの時代だったが、これからはしぼみの時代。今、一般的にデフレといわれているのは数量とか価格の面だが、他にも日本には資産デフレ、供給過剰によるデフレ、さらに資産デフレの影響で信用デフレまで起きている。すべてが収縮しているときに、地域、産業構造などを含めて大量生産を前提とする以前と同じ仕組みではどうにもならない。新たな仕組みは何かというと、人間が大量生産、大量消費、それに付随した豊かさから、違う豊かさを求める時代になること。世界的な人口増大、他方で国内の少子高齢化といった観点の中で、日本はもう少し落ち着いた、しっとり感のある経済体制、仕組みを再構築していく必要がある。地域もそれに向けて仕組みづくりを考えていかなければならない。これまでのような拡大一辺倒でみんなが時間に忙殺されてつま先立ちしているような時代から、もう少し落ち着きを取り戻していかなければならない。経済人からすると「今は〝華〟なんか見

これからは〝しぼみ〟の時代

小嶋

ているゆとりはない」というのが本音だ。しかしこのまま進んでいったときの厳しさ、こわさを感じる。政府に対する期待感もデフレしている中で、自分達ができることを思い切って、地域、社会で取り組んでいかなければ新しい仕組みはできていかない。

岡﨑　本当に心の時代が来たと思う。今、製造業を中心に、どんどん産業が空洞化していき、これから日本はどうやって生活していくのだろうか、不安な時代になってきている。これまでの生活を維持するのはもう無理。江戸時代が三千万人の人口だったことを考えると、今は四倍に膨れ上がっている。

価値観の転換が必要

岡﨑

この人口をどうやって養っていけるのか。だからといって貧しくなるのは悲しい。価値観を変えて「物質的豊かさだけが豊かさではない」という考え方に改めていかないといけない。ある意味では物質的な生活レベルを切り下げるということになるかもしれないが、そのことを貧しいと感じるのではなく、「それでいいんだ」という生活にしていかなければならないと思っている。

“華”のシーズ

自己犠牲の伝統がある

武田

武田　岡山には〝華〟のシーズ（種）はたくさんある。例えば地域と密接に関わりのある民間の美術館や博物館が多い。ＡＭＤＡ（アジア医師連絡協議会）はぜひ評価すべきで、大きくしなければならない。青年海外協力隊などと同じで、献身的に自己犠牲の精神でどんどん出て行くことが必要だ。そのシーズはある。ＡＭＤＡ代表の菅波茂氏に聞いたが、今回のアフガニスタン報復の際、すぐ現地に行こうとしたが、外務省に止められた。一方で国は自衛隊の後方支援、安全確保などといった論議に時間をかけている。日本には一人の命を救うため、危険を顧みず現地に行こうとする人たちが大勢いる。岡山には伝統的に種がある。掘り起こすだけで〝華〟につながるはずだ。

岡﨑　それを自覚することが必要だ。確かに菅波氏に「なぜ岡山でＡＭＤＡなのか」と聞くと、「岡山にはその風土がある」と言っていた。歴史的にも岡山には、こうした組織を

許容する土壌があるのだろう。

池田　大原さんにとっては、専門分野の話になる。

大原　確かにＡＭＤＡは岡山の〝華〟。独り善がりの〝華〟ではなく、世界から認められた〝華〟だ。そのことを岡山人

ＡＭＤＡは世界の〝華〟

大原

として認識し直したい。

岡﨑　岡山のすばらしいところといえば、例えば旭川の清流化問題がある。伊原木一衛前岡山商工会議所会頭が声を上げた時、みんながが賛同してくれ、組織ができた。随分成果を挙げてきている。県内三大河川で人とタンチョウの共生を目指そうと「岡山県タンチョウの会」が発足する話も進んでいる。実現すればすばらしい話だ。旭川をみんなできれいにし、その上空を鶴が舞っているとなれば最高の情景。県民自身は認識はしていないが、こうしたことにみんなで取り組むという県民性がある。

池田　岡﨑会頭自身が活動に携わっている立場から思いを強くしているのか。

岡﨑　県民にはボランティア精神があり、声を上げれば寄ってくる。ただ、ＰＲが下手なのは問題だ。

小嶋　経済人の立場から考えると、岡山の一番の誇り、〝華〟と言えるのは、経営者の自主、自立、自衛の思想だと思う。つまり、人の世話にならない。これは、今の新しい時代に向いている。社長の人数が岡山県は屈指の数を誇る。全

皆で取り組む県民性

岡﨑

国四番目くらいだといわれている。小さくても一国一城の主を目指す経営者が多い。これは岡山が自信を持ってよい。これからは大企業の時代ではない。大量生産の大企業時代から地域で特色を持った個性ある企業の時代へ、岡山は比較的土壌が整っている。だからこそ、新しいものが生まれてくる可能性にかけたい。美術館の数にしても大きなものは少ないが、小さなものはたくさんある。これも「自分の文化を持とう」という自主、自立、自衛の精神に起因する。

武田　やはり、根元にはシーズがたくさんある。

自主、自立、自衛の思想

小嶋

シーズを活かす

地域の仕組みが課題

小嶋

小嶋　「資金はないけれどこんなことをやっているぞ」という精神がもっと表に出て、産業、経済に波及してくるとおもしろい。何が足りないかというと、個性を持った人が集まったときに、力を合わせて何かできるかどうか。個別の素材はいい。料理と同じで割くの「割」はあるけど煮るの「烹」がない。岡山は素材はいいが、料理して上手に育てて「割烹」することにならない。この材料をどう生かすか。地域の仕組みを考えなければならない。

武田　二十世紀と二十一世紀がどう違うかというのは、本当のところは誰もわかっていない。いろんなシーズが育ってくることによって新しい産業が生まれる。それをきっちりと育てていくことが、現在の混沌から抜け出して次の時代の産業につながり、リードしていける県になることができる。一度、ご破算にしなければ次は生まれてこない。これまでの戦後五十年のやり方では駄目で、一度すべてを洗い直せば、そこから何か生まれてくる。

従来のやり方ご破算に

武田

岡﨑　ＮＰＯが新たな仕組みの基をつくるのではないか。最初から事業にしようとすると難しいが、結果的に産業につながっていく。

ＮＰＯが基になる

岡﨑

大原　「ご破算にしなければならない」というのはその通りだ。これまでの企業の仕組みは駄目で、マーケット、市場志向といわれているが、この志向を突き詰めていくとご破算にせざるを得なくなってくる。企業はそれで強くなっても国民生活は無茶苦茶になる。だからＮＰＯが社会のバランスをとるために必要になってくる。「旭川を日本一美しい川に育てる会」は伊原木さんと岡﨑さんのチームでスタートした活動がＮＰＯに育ち、出来上がった旭川ネットワークは、日本の川のネットワークのモデルになっている。高梁川にも「高

マーケット志向では無理

大原

梁川流域ネットワーク」という組織ができている。いろんな形の素材が育てられて、世界からも認められている。例えば、日本のことを世界に紹介する「ルックジャパン」という雑誌

がある。それに取り上げられている企業家は大部分が東京の人だが、地方で複数の人が紹介されているのは岡山県ぐらいだ。林原の林原健社長、ベネッセコーポレーションの福武總一郎社長、春ごろには私も出る予定だ。岡山は日本の「地方」の中でも、かなり特別だと思う。

岡山県人

池田　どうしてだろう。住んでいると岡山の良さは意外にわからない。

小嶋　独立心の裏返しで他人のことに関心がないのではないか。人を評価することが弱い。全国で地元の偉人を顕彰しない県が二つあるといわれる。一つが岡山でもう一つが新潟県。岡山には顕彰すべき立派な偉人がたくさんいるにもかかわらずだ。

池田　小嶋さんは津田永忠の顕彰活動をされている。

小嶋　ここ数年で、津田永忠の記念公園をつくろうと計画している。三十㌶ぐらいで、お金をかけない、岡山らしい自然のままで楽しんでもらえる公園をつくろうと、準備している。金がないからやらないのではなく知恵を使ってやるつもりだ。

池田　経済団体のトップとして、団結力という点についてはどう考えるか。

岡﨑　他県のように、強力なリーダーシップを持った人が

リーダーに従う機運ない

岡﨑

一人いて、その人の指導力の下に一致団結するという機運は岡山にはない。そういう面でまとまりに欠けるということはあるが、これは逆にいいことでもある。

小嶋　ボスがいなければまとまらないというのは民力が低いことだ。

武田　まとまる知恵がないのではないか。岡山県からは戦後優秀な人材をたくさん輩出している。県民が誇りをもって、そういう人をもっと顕彰していく必要がある。そうしたことがまとまりにつながるのではないだろうか。

活性化

アイデアで人は集まる

小嶋

小嶋　「自分が自分が」と言っている人たちを、まとめようとしてはいけない。アイデアがよければ、「この指止まれ」で人は集まってくる。

武田　これからは会社の仕組みが変わってくる。小企業でも。あるプロジェクトでメンバーが集まり、大企業のような仕事をして済んだらまた解散する。組織を維持するために、大勢の社員がいるということは二十一世紀には意味を持たない。

小嶋　岡山の人は岡山弁でいう「〝おせ〟される」のを嫌う。〝おせ〟するのではなく、自らが参加する仕組みをうまく整えていけば、結構みんな燃える。

武田　他にないものを考えなければならない。ないものを探してきてないものを作り上げるのが独立性。やることはいくらでもある。堀場製作所の堀場雅夫会長が講演でおもしろい話をしていた。

「ベンチャーが出てこないと二十一世紀の日本経済は活性化しない。しかし成功するのは百社のうち三、四社。問題は資金。日本は宝くじや競馬、パチンコなどギャンブル産業に年間二十四兆円使っている。その三分の一、五分の一でも流す方法はないか。競馬新聞のようなベンチャー新聞を出して、オッズをつけて投資を促してはどうか」。

小嶋　米国のエンジェルはそんなもの。投資するということは賭けのようなもの。確実に成功するのがわかっていたら、投資はしない。

大原　少なくともベンチャーを育てることは、全員の問題。ベンチャーに資金を出している金融機関は外資系が多い。結

課題多いベンチャー育成

大原

果的においしいところは外資にもっていかれることになる。

小嶋　日本の商社がそういう機能を果たそうとし始めている。三菱商事は米国で投資し、それが育ってきて、投資利益も大きくなっている。日本にもあるはずだが、仕組みが悪いから一般の人が出ていけない。税制、寄付などの問題に加え、個人が投資してしくじったとしても損金にならない。仕組みを変えないと新しい芽は出てこない。まちづくりでも、日本の仕組みではできない。テロの後に、岡山空港三千㍍化記念便でアメリカに行った。ラスベガスとロサンゼルスの地域開発を視察し、日本は自治の国ではないと気付いた。ハリウッドでは、全員が自分の固定資産税を上げ、その税金をファンドにして資金をつくり地域開発をする。住民の合意で増税して地域に投資する。サンディエゴでは地域開発すると固定資産税が上がるのを見越し、将来の含み利益をファンドにして地域開発をしている。地域住民が自ら選択している。日本の場合、行政が動かないとなかなかできない。自らの力を出そ

うとすれば、それぞれの人がお金も出していかなければならない。「国に出せ」と言っているから閉塞している。千五百兆円ある個人資産を動くようにすれば、未来はある。特に岡山は貯蓄志向が高い。先日、「地方で税制をつくろう」と提案したら「できません」と言われた。「新しい税制をつくることはできてもやった瞬間、地方交付金がもらえなくなるから」という。地域が努力するだけ損というわけだ。中央集権制度でがんじがらめになっているもろもろの仕組みを変えていかなければならない。

武田　それについては議論が進められている。今年九月ごろに、経済同友会で答申を出そうとしている。地方の自立の財源のためには地方交付金問題についても考えていかなければならない。

地方の自立考えなければ

武田

小嶋　過度なる中央集権の中でも税制的な硬直感は激しい。ものごとすべてアメとムチがいる。日本の場合はムチばかりだ。

岡﨑　ヒトゲノム（人間の全遺伝情報）研究の問題でも、そもそも最初は日本人の研究者が言い出した。しかし、取り上げられることなく、結局は欧米に先を越された格好になった。日本人にも知識、アイデア、発想に優れた人はたくさんいる。しかし、同調して盛り上げていく土壌がなく、日の目を見ないで埋もれてしまうケースがある。斬新なアイデアを受け入れて育てていく土壌をつくっていかなければならない。

企業の役割

武田　企業の側にも責任がある。明治の経営者は事業を拡張すると同時に道徳、仁義を大切にし世の中のために尽くしてきた。今は事業を伸ばし数字ばかりを追いかけ、世のために尽くすという視点が欠けている。政府のせいばかりにするのではなく、我々の責任もある。資本主義は倫理観がなければうまく機能しない。

大原　機能できないように、がんじがらめにしている。社会活動を尊重しすぎるとすぐ、逆の影響を受けるため、企業は株主中心にならざるを得ない。もちろん悪いことをしてはいけないが、いいこともせずに事業拡大に専心するしかない。だからこそ、ＮＰＯの存在が必要となってくる。

武田　ＮＰＯは雇用吸収力もある。

大原　米国ではＮＰＯが雇用の八％を占めている。日本は三％程度しかない。

岡﨑　全くその通りだ。企業が社会活動に力を入れにくくなっている中で、それをカバーできるのはＮＰＯしかいない。

ＮＰＯが社会活動ささえる

岡﨑

失業率が悪化している状況で将来的に雇用面での期待が高い。社会全体を円滑にするためにＮＰＯの存在は今後ますます不可欠になるだろう。

小嶋　日本はバブル崩壊とともに経済そのものに自信を無くしてしまった。「岡山県は上場企業が少ない」と悪いことのようにいわれるが、実は違う。利益ばかり重視して、社員をリストラし、それで株価が上がったなどというのはとんでもない。自らの資本で守っている企業こそ重要だ。余計な影響を受けずに、信念と理念をもって地域のために経営ができる。岡山に上場企業が少ないということは岡山の〝華〟の一つだ。日本の株式市場は持ち合いが約四割を占め、個人は出てこない。投資するのは外国人投資家ばかり。これでは日本の資本市場は成り立たない。懸念されるのは、社債を出してきた企業が償還期を迎えたとき資金がつくれるか。銀行も融資してくれない。その時になって初めて上場企業は気付くのだろう。

池田　上場企業が少ないことが幸いしていると。

小嶋　上場する企業が出てくるのはいいことだが、上場するならば完全に経営と資本を分けなければならない。しかし、日本の企業の大半は公開したにもかかわらずオーナー企業のようなところがある。中途半端でやろうとするから日本の資

中小企業は国の宝

小嶋

本市場がおかしくなった。もともと日本は官制資本主義。個人の資本市場は広がっていないのに米国式の資本主義とごちゃまぜにするととんでもないことが起こる。米国人の判断の尺度を正しいと思うのは間違い。日本人は日本人としての経営「人を大切にする」という考え方を捨てるべきではない。もちろん利益は大切だが、会社は人間が幸せに生活していくための道具。社員と地域を大切にしているのは地元の企業。だからこそ中小企業は国の宝だと思う。

池田　中小企業は「宝」。経営者としてどう思う。

武田　会社を継いだとき、運命と考え、規模のことはあまり考えなかった。私の役目は次の世代にバトンを渡すまでのランナーだと認識した。こういう考え方をしている経営者は多いはず。京都には家族経営で三百年近く続いた歴史ある企業がたくさんある。みんな苦労している。優勝劣敗の淘汰が激しい資本主義社会の中で、「一子相伝」でやっていくのは奇跡みたいなもの。羊かんの老舗・虎屋（東京）もそうだ。

社会に役立つ企業でいたい

武田

先代の黒川社長は「のれんというのは革新の連続」と言っている。虎屋はパリに出店して約二十年になるが、随分長い間赤字だった。それでも、何故出すのかというと、「日本の文化を間違って理解されたくない」という一心からだ。一般の企業行為とはまるっきり違う。ＮＰＯとでも言いたい。金銭ではなく、会社の存在がどこで役に立っているかが大切だ。小さいかもしれないがそういう経営が日本的経営。規模ではない。

大原　先程の虎屋の話は、上場企業ではできない。株主中心の経営では、場合によっては横領や背任に問われかねない。上場企業になるとこのような物差しをあてられる。それが本

企業人の責任

上場しない企業が個性持つ

大原

来あるべき姿だということになっているが、それは違う。これからは上場しない企業が日本を支えていく。上場しない企業こそが個性を持ち得るからだ。逆に上場企業から個性を消してしまうような、現在の仕組みには問題がある。岡山の人はよく「足の引っ張り合いが多い」と泣き言をいうが、京都はもっと激しい。それなのにあれだけ個性があるのだから、それを言い訳にしてはいけない。

池田　〝華〟を持つということが今回の主要テーマだが、企業人として岡山の財界人は何をすべきなのだろうか。

大原　今、首都が日本をぐちゃぐちゃにしている。私は最初から小泉首相の改革に疑問をとなえている数少ない一人だが、あれは形を変えた東京覇権主義に過ぎない。日本にとって小泉改革は絶対良くないと思う。それだけに地方は首都と戦う姿勢をもっと見せないと大変なことになる。例えば、本四公団を地元で引き受ける話が出ているが、しかし本四公団の負債を生んだ経営責任は誰にあるのか。料金問題などで地元が述べた意見などはほとんど聞き入れられていないのに、地元に経営責任があるといわれても困る。責任と権限は裏腹のはず。権限の全くないものに押しつけられてはたまらない。

地方が連携し首都と戦う

大原

道路の問題でも首都圏の族議員同士の争いに地方が巻き込まれて必要とする道ではなく、必要のない道ばかりがつくられている。国の意志決定機構自体に疑問を投げ掛けていかなければならない。地方は独自の見方でやっていく必要がある。その意味で会議所も県単位で連携し、岡山県商工会議所連合会で政策委員会を作ろうと提案している。県連レベルで戦える姿勢を整えていきたい。昨年十一月、九県の知事が集まり「地域からＩＴ戦略を考える会」が岡山で開催されたことは評価すべきだ。出席された岩手県知事が次の日に倉敷に来られ、その時に「地方同士で手を組み首都と戦いましょう」と話をしたらすごく共感してくれた。地方は地方同士でインターローカルネットワークをはって首都と戦っていかなければ展望が開けない。そう思って今年も頑張っていきたい。

岡﨑　企業人がいろいろと考え、話し、実行しようとするとき、自らの企業のことを第一に考えるのはもちろんだが、

地域への影響考え行動

岡﨑

一歩立ち止まって、そのことが地域、つまり岡山県にどう影響するかを考えてもらいたい。企業人といえば、大きな影響を持つ人ばかり。話をするだけでも全体のムードにつながる

こともある。そのためにも企業人は常に県、地域が目指すべき方向、いろいろな計画、提言などについて勉強しておくことが必要だ。一人一人の企業人が地域のことを考え、自分に何ができ、どういう形で協力できるのかを考え、実行していけばものすごい力になる。それが岡山県の〝華〟を咲かせることにつながり、すばらしい地域ができることになる。その気持ちを忘れずに私も日々、できることを実行していきたい。

小嶋　陽明学の中で「知行合一」という言葉がある。人間は必ず良い心と悪い心の両面を持っている。だから「良い心を伸ばし、悪い心を押さえなさい」。その先が大切で「良いと思うことは実行しなさい」と。どんな良いことを考えても実行しなければ何の役にも立たない。日本ほど国民が賢い国は珍しい。指導者が賢くないだけだ。岡山の力を発揮するには、良いと思ったことを人まかせにせず自分で実行すること。一人ずつやれることをやっていったら大勢となって地域や国の発展につながっていく。まとめようとするのではなく、みんなが良いと思ったことをやっていったら自然にまとまっていく。きれいな〝華〟は必ず咲く。咲かすためには人が咲くのを見るのではなく、自分から咲くんだという気持ちを持ちたい。私自身も自分の企業を中心としたコミュニティーの中で地域に貢献できることを一生懸命やっていきたい。

自分で〝華〟を咲かせる

小嶋

武田　日本人は優れた民族。戦後、あれだけの復興をなしとげ経済大国となった。今、我々が日本国のビジョンとして、何を考えなければいけないかというと、人類に対する献身を基にした文化国家しかない。それ以外に外国に存在感を示す方法はない。企業の経営システムが変わろうとしている今こそチャンスだ。岡山県は都市規模も適当。音楽、学術、芸術、医学、何でもいい。いち早く、人を大切にする県にならなければならない。たくさんのいい人に来てもらって楽しい県をつくる。いい人でにぎわう方法を考えれば、後に新産業がどんどんついてくる。交通アクセスもよい。とにかく人材を集めることに本気で取り組めばいい。そうすれば岡山県にも日本にも未来はある。二十一世紀の価値は人間しかない。

21世紀の価値は人で決まる

武田

池田　それぞれ大輪を咲かせている四氏に示唆に富んだ話を聞くことができた。ありがとうございました。